

V-2 梁およびラーメンの新しい解析法 (相反作用法, 撓み法)

信州大学工学部 正員 谷本勲之助

梁やラーメンの解析を行うのに、古来いろいろの方法が与えられていて、たとえばカスチリャの定理を使う方法、クローパイロンの 3 連モーメント法、マクスウェルの相反定理による方法などがある。これらはすべて撓みの方程式 $d^2\eta/dx^2 = -M/EI$ に結びついている。したがって "2 階微分係数法" または "曲げモーメント法" と総称してよいであろう。ずっと降って $d\eta/dx = \theta$ を基にする方法が考案せられ、"撓角法" と呼ばれている。

ここに示すのは、 η そのものを基にする方法である。よって "撓み法" と名付けてよい。この方法によると、その基本理論が一本筋で誰にもわかりやすく、その上に計算手間が丈へん少なくてすむ。計算にはごく初等のマトリクスを使うのが不便利である。

1. 集中荷重のとき (図-1)。一般に撓み η は

$$\eta = K [1 \ \rho \ \rho^2 \ \rho^3] N (1 \ \kappa \ \kappa^2 \ \kappa^3), \quad (1)$$

ただし、 K 、 ρ 、 κ は列ベクトルを表わし、

$$K = Pl^3/6EI, \quad \rho = x/l, \quad \kappa = \xi/l;$$

$$N = \begin{bmatrix} a_0 & a_1 & a_2 & a_3 \\ b_0 & b_1 & b_2 & b_3 \\ c_0 & c_1 & c_2 & c_3 \\ d_0 & d_1 & d_2 & d_3 \end{bmatrix}$$

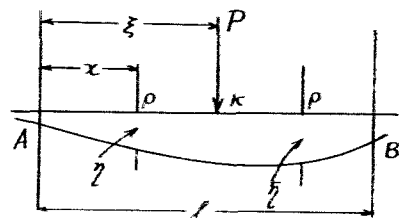


図-1

撓み角、曲げモーメント、せん断力はそれぞれ

$$\left. \begin{aligned} \theta &= \frac{d\eta}{dx} = \frac{Pl^2}{6EI} [0 \ 1 \ 2\rho \ 3\rho^2] N (1 \ \kappa \ \kappa^2 \ \kappa^3), \\ M &= -EI \frac{d^2\eta}{dx^2} = -\frac{Pl}{3} [0 \ 0 \ 1 \ 3\rho] N (1 \ \kappa \ \kappa^2 \ \kappa^3), \\ S &= \frac{dM}{dx} = -P [0 \ 0 \ 0 \ 1] N (1 \ \kappa \ \kappa^2 \ \kappa^3). \end{aligned} \right\} \quad (2)$$

両端 A, B (図-1) の支持条件には触れず、荷重 P が作用している条件:

$$(\eta)_{\rho=\kappa} = (\bar{\eta})_{\rho=\kappa}, \quad \left(\frac{d\eta}{d\rho}\right)_{\rho=\kappa} = \left(\frac{d\bar{\eta}}{d\rho}\right)_{\rho=\kappa}, \quad \left(\frac{d^2\eta}{d\rho^2}\right)_{\rho=\kappa} = \left(\frac{d^2\bar{\eta}}{d\rho^2}\right)_{\rho=\kappa}, \quad -\frac{EI}{l^3} \left\{ \left(\frac{d^3\eta}{d\rho^3}\right)_{\rho=\kappa} - \left(\frac{d^3\bar{\eta}}{d\rho^3}\right)_{\rho=\kappa} \right\} = P$$

これらを考慮に入れると

$$N = \begin{bmatrix} a_0 & a_1 & a_2 & a_3 \\ a_1 & b_1 & b_2 & b_3 \\ a_2 & b_2+3 & c_2 & c_3 \\ a_3-1 & b_3 & c_3 & d_3 \end{bmatrix} \quad (0 < \rho < \kappa), \quad \bar{N} = \begin{bmatrix} a_0 & a_1 & a_2 & a_3-1 \\ a_1 & b_1 & b_2+3 & b_3 \\ a_2 & b_2 & c_2 & c_3 \\ a_3 & b_3 & c_3 & d_3 \end{bmatrix} \quad (\kappa < \rho < 1). \quad (3)$$

よってマトリクス N を解であるということができる。

たとえば両端固定の梁では

$$\eta_A = (\eta)_{\rho=0} = 0, \quad \left(\frac{d\eta}{d\rho}\right)_A = \left(\frac{d\eta}{d\rho}\right)_{\rho=0} = 0, \quad \bar{\eta}_B = (\bar{\eta})_{\rho=l} = 0, \quad \left(\frac{d\bar{\eta}}{d\rho}\right)_{\rho=l} = 0$$

により

$$N = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 3 & -6 & 3 \\ -1 & 0 & 3 & -2 \end{bmatrix}.$$

連続梁についても同様に扱うことができる (詳細は別紙に与える).

2. 分布荷重のとき (図-2). 一様分布荷重のときは

$$\eta = K [1 \ \rho \ \rho^2 \ \rho^3 \ \rho^4] N, \quad (4)$$

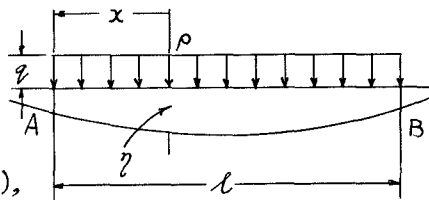


図-2

ただし $K = q l^4 / 24 EI$, $N = (a_0 \ a_1 \ a_2 \ a_3 \ a_4)$.

荷重のある区間については $N = (a_0 \ a_1 \ a_2 \ a_3 \ 1)$,

荷重のない区間については $N = (a_0 \ a_1 \ a_2 \ a_3 \ 0)$.

やはり N を解くといふことである。 a_i は梁の両端の支持条件または連続の条件から定まる。連続梁のときの連続条件は (図-3)

$$\left(\frac{d\eta_1}{dx}\right)_{x=l_0} = \left(\frac{d\eta_2}{dx}\right)_{x=0}, \quad E_0 I_0 \left(\frac{d^2\eta_1}{dx^2}\right)_{x=l_0} = EI \left(\frac{d^2\eta_2}{dx^2}\right)_{x=0},$$

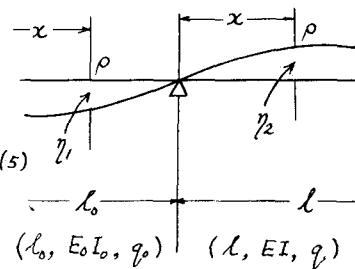


図-3

すなわち

$$\begin{bmatrix} [0 & 1 & 2 & 3 & 4] & \alpha^3 \beta \gamma [0 & -1 & 0 & 0 & 0] \\ [0 & 0 & 1 & 3 & 6] & \alpha^2 \gamma [0 & 0 & -1 & 0 & 0] \end{bmatrix} \begin{bmatrix} N_1 \\ N_2 \end{bmatrix} = 0, \quad (5)$$

ただし $\alpha = \frac{l}{l_0}$, $\beta = \frac{E_0 I_0}{EI}$, $\gamma = \frac{q_0}{q}$.

このときの両区間の撓み η_1 , η_2 は

$$\eta_1 = \frac{q_0 l_0^4}{24 E_0 I_0} [1 \ \rho \ \rho^2 \ \rho^3 \ \rho^4] N_1, \quad \eta_2 = \frac{q l^4}{24 EI} [1 \ \rho \ \rho^2 \ \rho^3 \ \rho^4] N_2.$$

多区間の連続梁は、式(5)を使い、組織的な計算順によつてたやすく解析せられる。

n 次の分布荷重:

$$p = q (c_0 + c_1 \rho + c_2 \rho^2 + \dots + c_n \rho^n)$$

のときは、同じようにして解析せられる。したがつて断面変位の梁の解も解析的にえられる。ラメーンについても同様に理論展開せられる。